

<松本道介>ドイツ文学の先生が「原子力とか放射能とかいうものが、この世のものでないからではないかということである。この世のものでないと言うと、死の世界だということになるが、死という方角ではなく、科学が進みすぎて人間の思考力や判断力の及ばない領域に入りこんでしまったせいではあるまいか」ということを受けて<吉岡英介>と言う人が「ああ、そうなんだ」目からうろこが落ちるような解説をしているので紹介します。

◎原子力の話が一般の方に良く分からないのは、根本のところの説明が省略されているからです。物が燃えるという普通の現象と、原子力とはどう違うのか。「普通に燃えても原子核は変わらない」「原子力は原子核を割る」

◎植物は大気中から二酸化炭素CO₂を吸収し、土中から水H₂Oを吸収し、太陽のエネルギーを利用して炭水化物（幹や葉や実）を作り酸素をはき出します。これを光合成と言う。しかし本質はちょっと違います。本当は太陽の光が主役「植物は二酸化炭素と水を利用して太陽の光を体内に閉じこめる」のです。つまり植物とは太陽の光のエネルギーが蓄えられたものなのです。

◎木がぼうぼうと燃えるのは、植物の中にある炭水化物（幹や葉や実）が大気中の酸素と化合（酸化＝燃焼）して、二酸化炭素と水になり、蓄えてあった太陽の光を熱として放出するという現象です。

◎動物は植物を食べ酸素を吸い、食べた植物と化合させることで、植物に蓄えられていた太陽のエネルギーを取り出してそれを糧に活動し、二酸化炭素と水と熱を放出します。これも燃焼のひとつのかたちです。

◎このように炭素や酸素は、ある時は植物に、ある時は動物に、ある時は空気になって、くっついたり離れたりするたびに太陽のエネルギー取り込んだり吐き出したりしてグルグルと回ります。地球の動植物の営みのほとんどは太陽の恵みによっています。

◎燃えても原子は変化しません。炭素原子と酸素原子と水素原子は、周囲の電子を媒介としてくっついたり離れたりしているだけで、原子そのものは変化しません。原子核もまったく変化しません。これが地球上でのふつうの営みです。木も草も鳥も獣も魚も虫も、このようにして生きています。

◎原子力では原子核を割ります。そして割れた原子は違う原子になってしまうのです。これは地球上での生命や物質の輪廻とはまったく違う現象で、太陽や星の内部で起きている現象です。

◎ウラン 235 は、外から中性子を入れるとプルプルとふるえてすぐに割れます。原子核が割れることを核分裂と言います。ウランが割れると、たとえばセシウムとかヨウ素とかコバルトとかストロンチウムになります。割れるときに大きなエネルギーが放射線の形で出ます。

◎このように、私たち地球上の生命体は太陽エネルギーで生かされていて、酸素は酸素のまま、炭素は炭素のまま、水素は水素のまま、物質が変わることなく、輪廻転生を繰り返してきました。これが「この世のもの」であり、「この世の営み」です。

◎宇宙空間は核分裂や核融合など、核エネルギーで運行されている。宇宙には放射線が満ちているので普通の生命体は生存できない。幸い地球は大気・水蒸気・地磁気のおかげで宇宙線から守られている。

◎放射線は細胞を貫ぬき、遺伝子（生命の根本）を破壊する地球生命の敵なのです。

◎原子力と放射線は、まさに松本氏が言う通りで「この世のものではない」のです。さらに放射線は生命活動に敵対するものです。ですから、「死」を連想することもあながち間違いではありません。物理学者たちは質量数239の人工的な原子に、プルトニウムという名を付けました。その由来は、「プルト」すなわち冥界（あの世）の王です。

「原子力はこの世のものではない」という、文学者<松本道介>の直感は正しいと言うべきでしょう。ですから第一感として、原子力の大規模利用などやめておけ、ということです。

吉岡先生の話は、原発の本当のコストの話、世界のまた日本の原爆の話、発電・送電の話、原子力利権の話と進んでいく。原子核を割れば放射線が飛び散る、地球から10キロも上に行けば宇宙線が飛び交う、それは死の世界、人類は原子核を割る技術は手に入れているが、飛び散った放射線を掃除する技術は無いようだ。

図版は焚火を囲んだ時の絵、メラメラ燃える火は、心休まる。

水族館に行った、と言っているけれども本当は大きな声では言えないというのは、その前の日に「明日は水族館に行けるかな」と家族の前で口走ってしまったのがいけなかったのか、3歳の子どもが「行きたい」とごねだし、「いやあ行かないよ」と口を濁すが後の祭り、いやはや困ったとそそくさと逃げ出したが、彼らも別の場所にある水族館に行ったそうだと後日談。

無数の魚たちと、人間の数とがどちらが多いのかというような喧騒の中、暗い水中から次そして次、50センチぐらい、同じ顔つきの黒に近いグレー色の魚、顔はごつくあばた面で悪もの顔、それでも目は睨みつけるでもなくまっすぐ何を見ているのか、何処を見ているのかわからず、スルリ右から左へ通り過ぎ、次の奴が又スルリ同じ目つきで通り過ぎ、同じやつが次から次目の前を右から左へ、上から斜めに、下から斜めに、やや平らかに、通過する。胴体には彼の大きさに釣り合ったオレの足の親指の爪の大きさぐらいだろうか、鱗が並んでいる、その鱗はキラキラ光っているというような表現には程遠く青黒い錆びを感じさせる鈍い色、強い感触、恐らく普段、彼らは少し深い荒い海の底近くをぐるぐる泳ぎ回り仲間たちと連れ歩き、岩の間に身を寄せて眠る。無を感じさせる目からは想像できないような荒々しい素早さでパクリと小魚を喰う、時には大型のそれこそもっと素早くもっと獐猛で、何時でも何処でも腹を空かせている猛獣を想わせるハンターに追われ、食い付かれ、引き千切られ、喰われてしまう、というような光景が海の底で、知らない間に繰り広げられているのが目に浮かぶ、というよりこれらも、いくつも見てきた動画像からの想像なのだけれども。

これは本当に、我が安威川で見た話を二つ。

カワセミがパッパッと飛び渡って来て、川面まで1メートルぐらいの小枝に横を向いて止まりじっと川面を見つめていると思った瞬間プスリと水に潜りそのまま枝に戻った。なんと彼の嘴には彼の嘴大の小魚がを横向きに銜えられ、光に反射して銀色に揺れている。空中に話す素振りでも小魚を右に左に、小魚の骨を砕いているのか飲み込みやすくしているのか、最後に小魚の頭を喉の方に、尻尾を嘴の先に向け一気に飲み込んだ、食べた、素早い、上手いハンターだと思った事がある。

次はおなじみの鷺君の話、彼らをいつも見ているが狩りの下手な奴、パクリと魚を銜えている姿はめったにお目にかからない、釣りをしているおっさんの傍でじっと立っている、しかも少し離れた処に立っている、釣り糸の方向を見ないで違う方向を見ながら立っている、観察するほどに面白い鷺君。一度はあの大きな嘴と同じぐらいの大きさの魚を銜えたがそっと離れた、銜えられた一撃で死んだ魚は流れに沿って離れていく、それを岸に居たカラスが銜えて持って行ってしまったがあれは一体何だったのだろうか、カラスのテリトリーで仕方なく渡したのか、何かのお礼にカラスに魚をあげたのか、それともカラスに恐喝されたのか不思議な光景だったが、言いたいのはもっとすごい話。

かの灰色の青鷺君、50センチぐらいの蛇を銜えているのではないか、オレが傍に居るのに蛇を離して逃げる様子も無く、巻きつく蛇を叩き付け銜え直して骨を砕きまた叩きつけと格闘すること数分、さすがの蛇の動きが緩やかになった、蛇が弱ってきた、ぐったりとしてきた処で、頭からスルリスルリと呑み込む情景を見た、その後何度か水を飲み何もなかったように歩いて離れて行った。

9月になって夏の暑さが無くなり、ぐっすり眠れる夜が続く。雨の日が多く安威川の河川敷も湿っぽい日が多く続く。川の水が増水した後に50セントもある鯉が、水に戻れず死んでいるのが2匹いたが、死骸の残骸が1週間もするとわずかの骨だけになって消えている。秋はバツタがたくさん飛び回っている、草刈り屋さんが草を刈ってくれるので歩いて進めるがそうでなかったら背丈よりも高い草がぼうぼうで歩道も塞がれ中には入れない。

歩いていたらやっと抜けた、本当にやっと抜けたと喜んでいるのは親知らずの歯の話。10年以上も前に寿司を食べていたら「ガリッと来て、痛てて」慌てて三木先生を訪ね「なんでほっとく、歯周病じゃ」と何度か通い「神経を抜く、早々に、そのうち抜ける、」と言われながらも時間が経ってもう10年以上。やっとこれで左右の奥歯で飯が食える、硬い物も噛める、酒が飲める。

若い頃に大きい土建会社でバイトをしていた。「君はいい身体をしているから似合うね」と言われそうだけど、残念ながらスコップで穴を掘り一輪車を操るといような肉体労働ではなくて筆で絵の具を塗っていた。知人に本職の配筋工になった奴が居た。配筋と辞書を調べたら載っていないのでやや不安になって WEB で調べると細い無数の鉄筋を縦横に組んでいる画像がたくさん出ているので、これだと安心して書き進めていきます。配筋とは、コンクリートを入れる前にコンクリートの補強の為に鉄の棒をたくさん組み入れておく作業です。地下足袋にニッカポッカの職人が鉄棒を切り曲げ縦横無尽に組上げていく、細い針金をくるくる巻いて結んでいく、翌日にはコンクリートミキサー車が来てコンクリートを流し込むので、配筋工によって組上げられた鉄筋は二度と見られないけれど、一日中見ても飽きないような面白い仕事です。建築労働者になった友人の自慢話、余談はさておき「うちの土建会社、将来展望と言う事で本職の土木建築以外になすべき事業は何かないかと模索している」と聞いて農業だととっさに答えた。土建会社だから農地を造る、2,3層の農地を造るのもお手の物、その農地の環境管理、風や雨や温かさというような管理の設備もお手の物、農作物を作る本職を呼んでくれればすぐにでも事業が出来る、食糧自給率の低い日本では絶対にいいアイデアで将来展望も開けると思ったが、農業を本格的にやっている大会社はまだ無い様だ。農業にしる漁業にしる他の人がその仕事をしようと参入できない仕組みとか制度があるのかもしれない、また外国との話し合い、輸出入の品目の話、その職業、利益に対する利権、権益、ムラの話、所詮農産物、工業製品に比べて利益率が低い、というようなややこしい話が錯綜するのもかもしれないが、農業をもっと盛んにする、自分達で作った物を食う、太陽の恵みを食う、今まで百姓屋さんだけの農作業を希望すれば何者でも何処でも出来る、というような状態はいけませんかねえ。

さて今日と明日の二日間で信州上高地に行く予定にしていた。今頃は高速道路をひた走っていたはずなのですが、一週間前から天気予報を見ている限り、まんの悪い（京ことば-運が悪い）事に今日と明日だけが雨、その前後は晴れの太陽マークが輝いている、“上高地の天気”を何度も調べたが今日と明日だけが雨というのは変わらない、これを書いている今、此処大阪は晴れているが上高地は小雨が降っているらしい。今回は登山ではなく上高地散策という事なのでヤッケと傘があれば楽しめるが、雨のアウトドアはいずれにしても楽しくない、ましてテントで泊まろうとしているその予定は、地面がぐちゃぐちゃ、濡れた身体も衣服も乾かない、靴も靴下も濡れるというような事が今まで何度もあったので、それはまあ悲惨で面白くない、楽しくない、の一言に尽きますので、昨日の時点で中止を決めた。上高地には何度も行きました、昔はマイカーも中に入れたが今はマイカー規制でバスでしか行けない、期間も5月のGWから11月ぐらいまでの雪が無い季節のみ、と言いますがオレは雪で真白い真冬も何度も入っています。一度は新穂高温泉から西穂へそこから下って上高地に入りました。11月から5月までの雪の時期も何度か上高知の入り口、釜トンネルを徒歩で入った。何年か前にこの釜トンネルは近代的な立派なトンネルに付け替えられたけれど、それまではデコボコ地面で真っ暗、水が滴り落ち、真冬の寒さで凍てつき流れていた水がそのまま氷に、そんな氷を踏み付けたらいっぺんにスッテンコロリとなった。そんな事を知らなかった最初は、山から降りてさあ帰ろう、「トンネルを超えたら車が止めてある、あとは風呂に入って着替えて飯を食って」最後の10分20分の行程ぐらいはと高を括って、トンネルを出た後の事を考えルンルンとした気持ちで暗そうな中を何分か歩きだしたのは良かったが、本当の闇の暗さ、地面のデコボコ、流れていた水が何やら凍っているとわかり、慌てて荷を下ろし、真っ暗なトンネルで、ヘッドランプ、ピッケル、アイゼンとリュックを掻き回して探しだし取りだし、まずはヘッドランプを付け、アイゼンを履き、荷を元に戻してリュックを担ぎあげ、ピッケルを突き恐る恐る凍てついた氷の道をそろりと歩いて帰った。山の経験のある人なら暗い中で荷を掻きまわし装備をつけ直して再び歩き出す大変さをご存知だろうと思いますが、本当にこれは大変な作業で、エンジンをぶら下げられた馬が「やあご苦労さん」と言われながら「もう一週残ってましたごめんなさい」という感じでした。上高地は全ての季節に入らせてもらった。水の流れる湿原、霧の立ち込める山々と絵ハガキに在るのと同じ景色を何度も見た。同行した人たちの顔も思い浮かぶ、登った山も思い浮かぶ。近々是非また行きたい。

図版は昔描いた釜トンネルの絵を探したが見つからず、その当時描いたデッサンでお茶を濁します。

上高地行が中止になったとぼやいていた日から三日も経ったが、三日前に何時ものように台風の翌日には安威川に出かけたら泥水がごうごうと流れていた。今回の天気予報もたいした事は無い、何時もの様に空振り台風と想っていたが、大阪、この辺りの上流地帯は結構雨が降ったのか、土手の中ごろまで水に浸かった跡が残っている、土手の中ごろから上と下では明らかに色が違う、上流から流れてきた藁屑やゴミが引っかかっている。所々に茶色やら黒やらの大きな布が絡み付いている、これは何だろうと思ったら、工事現場によくある砂を入れる袋、トラック一杯分の砂を入れて積み上げられている袋だ。こんな物がたくさん流れ着いているという事は工事現場が崩れて土砂がたくさん流れているのだろう。今日は河川敷が走れないと“勝手知ったる”別の場所に移動して土手の上、短い距離を3往復して帰った。その翌日はもう普段道通りだろうと思ったら、河川敷までの水は引いているが未だに水量が多く、しかも土手自体が水をたっぷり含んでいるのか河川敷の舗装の上、あちこちで水が溜まっている。その水が溜まっている様子が、三日目の今日も続いているのにはびっくりするやらこれが水の恐さなのかなと思えるやら。ところが今日は河川敷に行く時間が夜になったものだから、人の多い安全な上流に向かって走り出したが、下流とはいささか様子が違う、というのは、オレの考えではいつもの事だけ大雨が降った後は、上流はさっさと元にも戻るけれども下流の方はいつまでもじめじめ水が漏れるような状態が続くのが多いので、今日の上流行きはなんの危険も心配もないだろうと何時ものように歩くような速さですたこら走りだした。川が蛇行する辺り、蛇行によって堆積物が積もりやすい処に来て、靴がすっぽり埋まってしまうような泥、これはダメだと道なき草の上を、泥の無い処を懐中電灯を照らしながら進んだらまた泥が無くなって走りやすい道になった。あそこだけが駄目だったただと次の陀行に差し掛かると、堆積物が拳大の石ころになっている、しかも歩みにくいぐらいにデコボコ積もっている。何年か前も同じように泥が積もり石ころが積もった事があった。そのような状態になってしまうと自然の力ではなかなか元に戻らないし、予算の関係か重機が入る工事が始まるまでには長い時間がかかったのを覚えている。今回も前回は自然の猛威、大雨の力はなかなかすごいものだけれど「だからダムが必要です」「だから河川工事が必要です」と言われても「自然の景観もいいですよ」とはオレの意見。

とにかくいつもぶらりと気軽に行ける京都嵐山の豪雨の様、今にも水が溢れようとしている保津川あの橋の映像を見て、あそこがあんな風になるのかと驚いたが、嵐山の川は以前から問題になっていたとか、というのは土木関係者はあそこは改修して土手の護岸をコンクリートにし、底を掘り下げなければならないと言っていたそうだが景観重視'日本一の観光地“という理由でそのままだったそう。50年に一度の災害に備えてという言葉と“そらあ景観が大事だ”という言葉のどちらを取るかと言えばオレは景観を取る。台風が去って2日も3日も経つのに、日照りの日が2日も3日も続くのに、未だに地面が濡れている、地面からじわじわ水が湧き出してくるというのが日本の地形だろうね、これだから草木も枯れず、砂漠にもならず何時の日も草木が生い茂っているのだろうね。不思議に思う事は我が安威川は普段は水が少なく、水のない処にはたくさんの生き物が居たはずだけれども、生き物連中は何処に避難したのか、そのまま流されて大阪湾まで行ってしまったのか、それとも水嵩を感知して徐々に土手の上えあがり、水か引いたよとみんなの声に呼応して“はいはい”といつもの処に戻ったのか、たくさんいるだろう皆さんに事はわからないが、バツ君は以前と同様跋扈というか、交尾の為とは分かっているのだけれども、大きい奴の上に小さい奴が乗かって、オレが近づけばたいがい2匹はパッと飛び去り分解するのに、オレの靴の傍で歓喜を謳歌している奴がたまに居るのには驚きというより称赞、というより、オレもそんな風に重なり合いたいなという情けない心情。

唐突でごめんだけれども、原発の話をちょっと言っておきたいのが 今、日本の50基ほどある原子力発電所の全てが止まっている、原子力発電をしていないという事実。原発は是非必要と言う人と絶対反対という人、どうもわからないねと言う人と今日本国中が右や左や原子力に対してわからないままにも意見を言っているが、ゼロという選択、NOという選択が今実行されているという現実、日本人が選択しているのがこの答えとせずせず受けとめている。というのは先日アメリカ在住の友人から電話がかかって来て“今現在、稼働ゼロ”と言ったら驚いていた。オレの理解だけれど、事故の起こった現場の放射能に曝されて汚染した水はジワリと海に流れ続けるだろうし、その解決方法は無いだろうし、誰もが知ってはいても公表しないだろうし、という風に黙って静かに時間が流れていくのだろうね。

宗教の世界で、思想の世界で、道徳の世界で、人々が「人を殺せ、邪悪な奴を抹殺せよ、悪人を殺戮せよ」とは言っていないが、戦争、征伐、肅清、の名のもとで、世界の何処かで、いつの日にも殺人が行われている。

中東の国シリアで、サリンを使った化学兵器で千人単位の民間人が死んだという。シリア国内の政治の事、シリアと関係している各国の事情、それらは世界情勢の評論家らの話を、ジャーナリストの報道を、断片的に聞いたがもうひとつ事情が呑み込めない。国を牛耳った人が、その権力や地位の大きさにもよるだろうけれど、一言でいえば「オレのいう事を聞け、全てをオレに渡せ、オレを敬え、オレに従へ」とこれらが完全に思い通りに出来たら、独裁者になればこれは最高の地位だ、安泰だ。人にとって憎い相手は知っている人、身近な人、自分の周りにいる人、それなのに敵対している人、自分とは立場が違い、自分とは立ち位置が違い、それ故に自分に対して精神的にも肉体的にも攻撃の手を緩めない奴、彼が彼らが一番憎い奴なのだ。「オレに逆らう奴をやっつけろ」「あんな国を毒する奴、あんな独裁者をやっつけろ」というような言葉があちこちに起こり、やる、やられる、やり返す、またやり返す、そんな繰り返し、そんなやり取り、それこそ解きほぐすこと出来ないような絡まり様、いわゆるゴヤご茶無状態の中、弾丸が砲弾が飛び交っているのだろう。

「民主主義だ」「自由主義だ」と言った処で、右だ左だ縦だ横だとそれこそ縦横無尽の考え、声、叫び、が出てきてどうにもならない状態になる、よくない事だとわかっていてもどうにもならない話。いろんな国、その国民、その民族、その宗教、その財力、その武力、世界にはいろんな事がありすぎて何が良いのか何が善なのかそれこそ混沌としている。

中島岳志氏が吉本隆明の事を書いている本の中に親鸞を語っているのが載っていたので紹介。

親鸞は「自力」を懐疑し、弥陀の本願という「絶対他力」に随順した。そして「凡愚」「凡夫」を自称し、農民と共に歩んだ。＜中略＞親鸞の「他力本願」は、存在の平等性を前提としていた。全ての人間は、すべからく他力の力に包まれている。弥陀の本願力は、全存在に平等に注がれる。衆生は、その力に促され、念仏を唱える。そこに浄土の道が保障される、エリートだろうが、大衆だろうが、存在の平等性は揺るがない。人間は一人残らず「存在する事の罪」を背負って生きている。この罪は刑法上の犯罪とは異なる。人間は自己の生を継続するために、動植物の生命を奪い続ける。子孫を残すために性欲を発露しなければならない。存在には平等に「罪」と「悪」が内包される。

これを読んで、「平等」という言葉がずしりと重くのしかかった。「存在する事の罪」という言葉がずしりと重くのしかかった。日本人は性善説の人が多く、世界はもっとしたたかだともいう、日本人は金儲けと商売の事ばかり言う、アメリカの大統領が「開戦する・アーメン」と言っている、どれもこれも、誰もかれも、生存の為、生きていくための知恵であり、共存していくための知恵だ、何がよくて何が悪いのか今のオレにはわからない、時間が経たなければ答えは出ない。

「平等」オレはこれで行く。忘れないぞ。

「存在する事の罪」これはいつも忘れていて、オレはこれでも行く。忘れないぞ。

深く受け止め、生きていこうと思った。

図版は、檻褻くん。同じような色の絵の前に置いたら、なかなか男前じゃないか。

今回の山は「午後から出発なので、まずは湖東で一泊してから八ガ岳方面もしくは何処かと曖昧な設定で、三泊四日の車旅という事に決めましょう。食料はその都度現地で購入、基本的な道具だけを持っていこう」とキヌちゃんの弁で出発した。性格的にきちんと計画をする人だったけれど、「行き当たりばったりでどうにかなるさ」という考えの周りの人に合わせたのか、歳と共にそれも良しと思ったのか・・・、時間通り迎えに来てくれた。

湖東は湖西に比べて人口が多いというのか、都会なので湖岸と雖も家がたくさんある、人がいっぱい「ちょっと停まってテントを張り寝させて下さい」という処がなかなか見つからない。湖西はよく行く、比良山へ登った帰りちょっと湖岸に立ち寄って湖を、港を、釣りをする人、泳ぐ人、何度か立ち寄った。更に湖北の方に行くと人が居ない静かな場所に公園がポツリポツリと作られている、桜並木の波打ち際、昔ながらの街道筋、集落と集落の間が長く、まだまだ開けていない良さが残っている。

波打ち際でサボテンを拾った、手の平サイズの一枚が先日の台風で何処かから流れてきたのか、まだ青々として打ち上げられた藁屑のゴミの間にころがっていた。もって帰って育ててみようとして手に取り、散歩してよいよ食事を始めたが、まずはビールで戴きますと喜びはしゃいでいたが、手がちくちく痛い「アレレ刺だ」と気付いたけれど、見てみると、細い微細な刺が手のひらの指に無数に刺さっている、抜くには細すぎる短すぎる「いてて困ったな」試しにと前歯で咬んでみたら、歯の感覚、口の感覚はなかなか鋭く、1,2本が難無く抜けたがあとの物はすでに中に入り込んで抜けない。このままだと困ったと思っていたが、1時間もすると少し痛みが取れてきて翌日には痛みは軽くなっていた。

高速道路に乗って一路信州へ、唐沢鉱泉から黒百合ヒュッテへとコースを決めて走りだした。キヌちゃんは北八ヶ岳がたいへんお気に入り、GWも麦草峠から白駒池に行った。今回は黒百合ヒュッテで泊まって散策と決めた。唐沢鉱泉真近にはなんと車だらけ、あちこちの道路に駐車してある、皆さん北八ヶ岳に登っているのだろうけれどもまたまた“登山ブーム”が訪れのやもと首をかしげる。今まで何度もここを訪れてはいるがこんなにたくさんの車を見たのは初めて、夏の新穂高温泉と言ひ、唐沢鉱泉と言ひ、人がいっぱいの様ようだ。

テントにシラフ、食糧に燃料、相変わらず荷はずしりと重く、石ゴロゴロの登りは一步一步が“ハアハアゼエゼエ”だ。この登りは何時も苔むしてひんやりした緑の空間はそれだけで心地よくなるのだけれど、今年は雨が少ないのか、季節がそうなのか、青々とした何時もの緑ではなくやや色褪せている、先日の台風も信州だけは避けたのか、何時も流れている澤の水も全く涸れている、その水が涸れているのは上に行っても同じで、小屋の傍の何時も水が流れている水路もチョロリと水が溜まっているだけで、小屋の中に「泊まりの方、テントの方はこの飲料水を使って下さい。一般の方は売店で水のボトルを買って下さい」とポリタンクに書かれている。水は無くても湿度が低くても、この登山道は木々の緑のトンネル、岩や低木には苔、所々の澤を跨ぐ橋、いつ来ても素晴らしい。晚餐は得意の豚汁「酒粕が無いので酷（こく）が足りない」とキヌちゃんがぼやきながらもなかなか美味だ。ビールで乾杯それから昨日の残りのウイスキーがこれ又旨い、と旨いづくしだ。

朝は晴れていたのに急に霧が出始めた、風が冷たくなってきて今まで見えていた陽に光った山並みが、木々が、岩が見えなくなってきた。天狗方面を一周して登りの谷筋ではなく尾根筋を通過して唐沢鉱泉まで下った。この尾根道は穏やかな丸い大きな背の真中に道があるような地形で、まるでハイキングコース、昨日の重い荷も、食糧、水分は無くなって少しは軽く鼻歌気分下った。

風呂に入ろう温泉だという事で“石遊温泉（いしやす）”へ、此処は春にも来たが、建物には壁がない、石に囲まれた温泉の湯槽の周りは露天なのだ、屋根のある露天風呂と屋根のない露天風呂、扉のあるその奥が身体を洗う小さい部屋に6個の桶と椅子と蛇口、石鹸はボディソープだけ、単純シンプルなだけに“通”の方はなんとというか「冬はどうする、寒いのでは」と言う「ビニールで囲うのだそうだ」と教えてくれた。温泉は透明な湯だけれど身体を浸たし

ていると、ヌルヌルツルツルしてくる。いい旅でした。

13-067 八ガ岳Ⅱ 280913

人はそれぞれ、最高の場所だ、素晴らしい場所だと絶賛する処が、それこそそれぞれ人によって違う。よく山に登るがそれぞれの場所に立てばその時は綺麗だ、感動する、素晴らしいと思うけれど、今日のこの景色はいい、斜面全部がオレにとって素晴らしい。オレがいういい場所、桃源郷と呼んでいる場所、それが今日の此処と、甲斐駒ヶ岳、水仙小屋を少し行った処「なんだしょうもない」と言わないでください。白い岩に緑の低木、ゴロゴロ岩が積み重なっている、ケルンを積むように、巨大な鬼君が一つ一つ面白がって積み上げたような形、どれか一つを蹴飛ばせば、ガラリゴロリと落ちそうな積み上げ方で乗せられている。なんとと言う石かはわからないがザラザラした脆そうな岩肌は火山の名残なのか、どうしてあのような積み方になったのか不思議な光景。池がある、火山の火口なのか、カールの跡なのか。此処からはぐるり見渡せる、天狗岳が見える、その向こうの硫黄岳は見えないがすぐそこだ。緑のハイマツの中から白骨を想わせる色の枯れた木の幹と枝がクネクネ宙を這っている。こちらの木は冬の吹雪を連想させるようにやはり白い幹が伸び枝は上から下まで一方向にだけ付きだしている、普通の木のように360度に枝が張れず一方向にだけ枝は風速何十メートルを想わせる。ケルンが所々に在る、ケルンを穏やかな暖かい昼の光の下で見ると、子供がいたずらに楽しそうに積んでいる姿を想わせる。小石を山のように積み上げてこれ以上一つの石も積めないよと言うぐらいに積み上げて、尖がり山のように積み上げて遊んでいる。ところが天候が急変して前も後ろもわからなく吹雪が荒れ、痛い様な雨が降れば「ケルンが此処にある」「ケルンを見つけた、助かった、この道で間違いなしだ」山男を助け励ましてくれるのだ。ハイマツと緑もいよいよ濃く美しい限り。斜面の向こうは雲海が見えるが今日の雲海は少々侘びしい。雲海で思い出すのが夏前、室堂でバスを降りて劔岳に向かう途中の別山乗越（のっこし）へ登りながら、バスの来た方を振り返ると急流が流れるように雲海が流れていた、それはすごかった。下に小屋も見える、黒百合ヒュッテだ。その小屋のホームページに老オーナーが書いた昔話が載っていたので紹介します。

むかしむかし、八ヶ岳も富士山も活火山で煙をあげていた頃のお話。富士山の神様は「木花柵耶姫（このはなさくやひめ）」八ヶ岳の神様は「磐長姫（いわながひめ）」いつも二人の神様は、お互いに自分が一番高いと言っていました。ある日、富士山の神様が八ヶ岳の神様に向かい、「わたしのほうがあなたより高いのよ」と言い、八ヶ岳の神様は「わたしのほうが高いわよ！」と喧嘩がはじまった。見かねて如来様が喧嘩をやめさせようと思い、「水裁判をしよう」という事になり、八ヶ岳の峰から富士山の峰まで長い樋をかけ、そこに水を流したそうです。すると、水は八ヶ岳から富士山へと流れ、八ヶ岳のほうが高いという事に決まったのです。ところがプライドの高い富士山の神様はこの結果がどうしても承知ができず、怒って思わず八ヶ岳を蹴飛ばしました。天地も揺らぐほどの大音響で八ヶ岳は八つに裂けてしまいました。それで、八ヶ岳は現在の形となり、富士山よりも低くなってしまったのでした。

急に霧が出てきたと見上げていると、たちまちこちらに押し寄せて来て、陽の光が遮られぞくぞくするような冷たい風が吹き出し、ますます白さが濃くなって「これは雲だ、霧ではなくて雲だ」「よく下から山を見上げたら、中腹から上が見えない、雲に隠れて見えない」「雲だ」「いやあ、下から見れば雲だけれども、此処ではこれは霧じゃないのかな」なんて問答も1時間ぐらいしてまた晴れてきた。夏の北アルプスも荷が重く「ハアハアゼエゼエ」の連続だった、今回は少し荷は軽いけれど少しの軽さぐらいではやはり「ハアハアゼエゼエ」だった。一步一步がなかなかきつい苦しい、何年か前と比べるとグイグイ楽々登っていた当時を思うと、体力の衰えを感じる。だらしないね、情けないねと思うけれどもこればかりはなかなか元には戻れない、どう仕様もないね。家の近所に何時も見かける犬が居る、子どもの頃から飼われている犬、何時も扉の傍に繋がれてずっと扉の方を見ている。だんだん髭が白くなりだして、最近はなんだかヨボヨボしだしている、犬は人の7倍早く歳を取るとはいうが、「え、お前もうヨボヨボじゃねえか」とは声もかけられないけれど、自転車で傍を通りながらいつも彼を見ている。まだまだ頑張らねば、オレは。

図版はケルンの絵。尾根道のただっ広い処には、背丈よりも高いケルンが積まれている。

13-068 八ガ岳Ⅲ 300913

八ガ岳最後の日、人氣が全くない屋根のあるバスの停留所を見つけ、「ここならテントを張らなくても寝られる快適な場所を見つけた」と晚餐が始まりビール、ワインと迷亭、陶酔、シラフを持ってベンチで横になった。ジュースの自動販売機から大きな音が出る事を初めて知った、うとうとしかけたら“ガチャ”という金属音でまず驚かされ、コンプレッサーが廻り出し、何分かしたら“ガチャ”という金属音で静かになる。その“ガチャ”の都度に目が覚めた、朝までに何度も聞いた。道路脇に置かれた自動販売機からあのような大きな音が出ているとは知らなかった、無論コインを入れてボタンを押せば“ガチャリ”とジュースが落ちてくるその音は聞き慣れている。

面白い夢を見た。オレの夢は子ども時代から総天然色のカラー夢がほとんどで、と言いながらカラーでない夢があるのかと反対に言われそうだけれど、夢の話をして人と詳しく話した事がないのが一つと、古いねと揶揄されるかもしれないけれど、オレの子ども時代には総天然色という言葉がおお流行りで、映画も写真もTVもカラーになった色が付いたとはしゃいだものなんですよ。オレの夢は画面全体が大きく3D効果が抜群の立体映像が満天に広がり、TV向きというより映画館上映用だと自負していました、などと余談は置きます。

人が人を危（あや）める話、殴る、叩く、刺す、人が人を痛めつける、殺してしまうというような話をしていた。計画的な話は別にして、衝動的に心が身体が動いてしまう「殺してやる」とたまたま傍に在った棒を、包丁を持って相手に向かっていく。もうどうでもいい、どうにでもなれと日常を放棄して、自暴自棄に、人の死を自分の死を掴んでしまう。人の尊厳も、平等も喜怒哀楽を司る生命体そのものを絶ってしまう。そのような状態になってしまった人の精神のありようの話をしていた。ほとんどの人がぶるぶる震えながらも振り上げた拳を、握りしめた包丁を降ろしてしまうのだが、時間が経って「やはりあの時決行しておくべきだった」と思うのか、「やめておいて良かった」と思うのか、其の人の生き方だ。

夢は、人が包丁を持って人を襲っていた、バスやら車が並ぶ駐車場、雨に濡れた夜の帳の中、舗装された路上で人が走り、叫ぶのが聞こえ、ヘリコプターが舞い、ライトが照らされた映画のような場面がオレの目の前で展開された。ヘリコプターがふわりふわりと上がったたり下がったり、光が右往左往する中、ヘリコプターも人格を持ったように目があり手があり、あっちこっちと揺れ動くうちに、なんと包丁を持った人がヘリコプターになってしまった、人がヘリコプターになった、人間がヘリコプターに変身するという奇想天外な様に、見ているオレが驚くやら、それは当然とうなずくやら、オレ自身も居なくなり、ヘリコプターもずっと居なくなって、駐車場は普通の駐車場の戻っていた、としていたらまた自動販売機の“ガチャ”がきた。

黒百合ヒュッテは亡くなった阪口さんと歩きながら、外のベンチで少し休憩させてもらったのが30年前の冬、今と姿が変わっていたかどうかは覚えていない。此処はこじんまりした小さい小屋ながらトイレは整備され、屋根にはソーラーパネルが並んでいる、テント代は1000円とよその倍の値段だけれど、トイレを見ればなるほどと思う。風力発電でポンプを回しトイレ槽を攪拌して分解しているそうだが、その説明は詳しくわからない。中西プロが夏の無数に並んだテントの写真を見て「こんなにたくさんのテント、たくさんの人が山に登って、小便も大便も急にもよおしたらどうするの、後始末はどうするの、小屋のトイレはどうなっているの」とメールが来た。外国でビニール袋を渡され、下山の折その袋を回収して重さを量る、という処までであるらしいが、オレの大小便を含めて山々が糞尿まみれと言うのはいささか恥ずかしい。昔とある山小屋のトイレは、そのまま糞尿が山の斜面に落ちていく仕組みというおぞましい光景だったが、今はどうなっているのか、まさかそのままではないとおもうけれども・・。

山を歩いていると、何処の小屋でも近付くと重油発電の機械の音が聞こえ出してもうすぐ小屋だと判るのだけれど、最近の機械は性能が良くなったのか、昔のような音と油の臭いは少なく、今回も登りながら空が見えだしてもうすぐ小屋だと判ったが音は聞こえなかった、むしろ人の声がまばらに聞こえ出したぐらいだ。

最近は電線が伸び電気が通じている小屋、自家発電、風力・太陽光発電で灯りがともり、TVも見られる。電話、無線、診療所、等は昔では考えられない。水も黒い丈夫なホースを何百メートルも伸ばし、水槽は何時も清水が溢れ水道完備の小屋も多い。食料、燃料、人、建築資材、重機までもがヘリコプターで荷揚げされ、昔のように荷を担いで上下するボッカの人、小屋の柱や壁にいくつもぶら下がっていたガラスのランプ、屋根から伝う雨水をためる装置（と言っても雨樋と桶のこと）、薪を燃やす囲炉裏、そんなものはもう昔話になった。若い男女が増え、色とりどりの山用のグッズ、飛び交う元気な声、負けてられないぞと思うも、追い抜かれてしまう。山をランニングする人たちまで出てきた。雪のシーズンも彼ら若者も居るのかなあ。間もなく山は雪が降る。